

## 第11章 家族

歌いつがれて、歌は生きる。

記憶の源泉から、蘇ってくる歌がある。

きびしい冬にも、あたたかい歌がある。

歌いつがれる、歌がある。

池田小百合

坂本龍一監修CD『にほんのうた』四集のステッカー

ウチには、こんなのがいます

「ムカデ」がいます

薄暗い廊下の曲がり角で、ゴムか葛<sup>くず</sup>キリかという感触の物を素足で踏んだ。すぐ電気を点<sup>つ</sup>けた。ムカデだった。びつくりして声が出なかつた。

ムカデの方も、驚き慌てた。のんびり歩いていたのに、突然人間に踏まれ、明るくなった。さ

らに踏まれたので五く六本の足が折れた（と思う）。のた打ち回っている場合ではない。本の隙間に逃げ込もうとしたが、うず高く積まれた本の間には隙間がなかった。無駄な努力だった。一瞬のうちに、その場にあった郵便物でたたきのめした。それで戦いは終わった。ムカデは必死で足をバタつかせたが、逃げ切れなかった。

勝利した私は、風呂場で足の裏をゴシゴシ洗った。なんとなくベトベトする。いつまでもベトつく。布団に入っても眠れなかった。「布団に出たらどうしよう。一緒に寝たくない。ビクビクです」と山形にいる夫にメールをしたが、返事が無かった。その内、寝た。雨が降っているジメジメした夜の出来事でした。

### 「ハクビシン」がいます

「玄関に夫のフンがあります。どうしたのでしょうか。昨日は、芝生の方に行きました」と夫が言っただ。「昨日のは、僕が処理しました」。

玄関のフンを二人で眺めた。おむすびの形をしたそれは、ビワの種の固まりのフンだった。私は、ハクビシンのフンだと確信した。隣りの家に大きなビワの木がある。今、黄色い実が実っている。ハクビシンは、猫の大きさだが、やせている。顔は細長く、鼻の所に白い筋が入っている。猫と見分けることができる。道を渡って御殿場線の雑草の方に行くのを何度も目撃している。「おい、ハクちゃん」と声をかけると、ビクンとして立ち止まり、こちらを見る。かわいい。ハクビシンはビワが大好き。

### 「ヤモリ」がいます

ヤモリとイモリは全く違う生物です。ヤモリ（家守）は、家を守ると書く。陸に生息している。爬虫類でヘビやトカゲの仲間です。家にいるハエや蚊、ゴキブリなどの害虫を食べてくれる。

イモリ（井守）は、井戸を守ると書く。水の中に生息している。両生類でカエルの仲間です。水回りを守護してくれる。昔は、水田にいる害虫を食べてくれることから大切に扱われた。イモリもヤモリも『神の使い』だと考えられていた。

風呂場の掃除をしていると、金網の外側から掃除をしている私を見ている。ヤモリだ。前足と後足の指が五本ずつ。しがみついている丸い指がかわいい。

台風之夜、外は滝のような雨。台所の窓ガラスにへばりついている。「だれ？」ヤモリだ。丸い指、なんてかわいいの。「中に入れてやろうか」、夫は返事をしなかった。雨の音で、私の声が聞こえなかったのでしょうか。

### 「アシダカゲモ」がいます

アシダカゲモが家に住んでいる。名前はラグビーの選手にあやかって「五郎丸」にした。このクモはメスだが。

暑い夏が終わり、秋になって忘れかけていた頃、五郎丸が出た。テレビの左上の壁に、へばりついている。時々向きを変えたりしている。横一の字に伸びたり、手のひらのように開いたりし

てリラックスしている。テレビを覗いているようだ。

テレビはNHKニュースをやっている。障害者施設で十九人が刺されて亡くなり、祖父母の家に遊びに来ていた小学生が母親を追って神社へ向かった後、行方不明になり、捜索の結果、翌日川でおぼれて遺体で発見された。台風の水害で老人ホームの人が避難できない状態で九人も亡くなった。釣り人は、立ち上がった二メートルもあるクマに襲われた。ツキノワグマか。目の下にクマの爪あとがある。目に当たっていたら失明していた。襲われた人は「空手をやっていたので助かった。普通の人ならやられていた」と言った。いやなニュースばかりだ。

テレビを消すと台所はシーンとなった。食器を洗ってからテーブルの椅子に座った途端、左斜め上から五郎丸が私の肩に飛んで来た。手ではらうと水道の上の壁に行った。「なつくな、五郎丸」。また、天井のコーナーで、横一の字に伸びたり、手のひらのように開いたりしてリラックスしている。

今度は本を読み出すと、後ろ上空から頭に飛んで来た。髪の毛を振り払うと食卓のテーブルに落ちた。大きい、白と茶色と黒のシマシマ模様の足、これほど真近で見るのは初めてだ。

風呂から出ると、寝室の壁にいた。私を見ている。布団の中に入って来たらどうしよう。ゾツとした。恐怖だ。寝返りを打った途端につぶしてしまう可能性がある。上掛けをバタバタさせてから寝た。時々ドンドンと叩いてみたりした。「怖いよ」ビクビクしながら寝た。それでも十秒で寝た。

クモは動く物をエサと認識する習性がある。私は、アシダカグモと同居しているが、どうも好

きになれない。バッタ、蝶、トンボは怖くないが、ムカデ、クモ、ゴキブリ、ヘビは、お近づきになりたくない。

翌日の朝、玄関のドアにいた。少し大きくなっていた。玄関を履くと脱皮殻が落ちていた。夕方、トイレに行くと、トイレの床にいた。おや？ 足が七本だ。「どうした、大丈夫か五郎丸」。この話を蜘蛛の研究者の夫にすると、「無理に振り払ったりすると咬みます」と言った。「エッ、五郎丸が咬むの？」。

◆昔、ある会社のノートの表紙にカマキリなどの昆虫やゾウなどの動物の写真が大きく掲載されたものが売られていた。「ハナカマキリ」の写真の表紙も、当時は人気で、だれでも買って使っていたが、現在は植物の表紙のノートは売られているが、昆虫や動物の表紙のノートは販売されていない。親や子どもたちから「気持ちが悪い」「怖い」などの声が寄せられるようになり、会社側がやめることにしたのだそうです。情けない話です。

### 「オカメインコ」がいます

愛知県に住んでいる次女からメールが来た。

「私は今四羽になったオカメインコたちの世話に明け暮れています。それはそれでなかなか楽しい。オカメを、へしゃべる&歌う<sup>アソブ</sup>ようにするには、育ちよりも生まれがかなり影響しているようです。同じように育てても、最初からしゃべるのはしゃべるし、しゃべらないのはしゃべらないです。面白い」。

一羽目のオカメインコは、私が勝手に「センちゃん」と名付けた。小さな命、鳥でも人でも同じで、いと嬉しい。

私の家で過去に飼った動物を紹介します。犬、猫、鶏、九官鳥、カラス、カナリヤ、シマリス、山羊、兎、亀、鯉、金魚、メダカ、カマキリ、カブト虫、モンシロチョウの幼虫、蟬の幼虫、モグラ、蟻、タランチュラ（世界最大の蜘蛛）の子供、フタホシコオロギ、アフリカツメガエルなど。プラナリアは、レバーを餌にして飼った。

本当にいろいろな動物を飼ったものです。子どもたちは大喜びでした。こうして育ったので、蜘蛛を見ても驚きませんし、モグラの餌のミミズを指でつかんでも平気です。動物との触れ合いは、心を寛大にさせてくれます。私は、アヒルにペンギン、ポニー、それにラクダやゾウも飼ってみたいと思っています。

## 努力に生きる

「朝は希望に目覚め、昼は努力に生き、夜は感謝に眠る」神奈川新聞の投書欄に出ていた横浜市の六十六歳の女性の言葉です。

平成二十八年九月十五日、テレビからは「六十五歳以上のお年寄りには三千三百四十二万二千人、日本の人口の四分の一を超え」というニュースが流れた。

「私たちも仲間だね」「そうだね」。娘たちからは「長生きをしてください」と声がかかった。若い人から「長生きをしてください」と声をかけられ、悪い気はしない。親からもらった命、大事にしたい。

「♪薔薇ばらのように咲いて 桜のように散る」歌手の松田聖子さんがX JAPANのYOSH I K Iさんが作った歌を歌う。

## 保育士試験に合格

金融に勤めている長女が、平成二十八年八月五日、神奈川県保育士試験に合格した。私は、その頑張りに脱帽です。

横浜市、川崎市は待機児童ゼロに対し、長女夫婦が住んでいる藤沢市は待機児童が増え続けている。その対策として藤沢市は保育士を育成するのかもしれないが、娘が自主的に試験を受けたのだとわかった。「長男を育てるのに必要な学習」と「将来やってみみたい職業」ということで受験をしたようだ。筆記試験と実技試験がある。

〔筆記試験〕 保育原理 教育原理・社会的教養 児童家庭福祉 社会福祉 保育の心理学 子ども  
もの保健 子どもの食と栄養 保育実習理論。

〔実技試験〕 二分野を選択する。

・造形表現に関する技術 テーマにそった絵を描く。

・音楽表現に関する技術。

課題曲「かたつむり」(文部省唱歌)「♪でんでんむしむし かたつむり」。

「おばけなんて ないさ」(作詞：榎みのり、作曲：峯陽)「♪おばけなんてないさ

おばけなんてうそさ ねばけた人が 見まちがえたのさ」。この二曲をピアノを弾きながら歌う。

・言語表現に関する技術。

お話(語り)課題「三びきのこぶた」「うさぎとかめ」「おむすびころりん」「にんじんごぼう  
だいこん」の内一つを選択、三分以内に語る。

娘は実技試験では、音楽表現と言語表現を選んだ。

〔私からのピアノ演奏アドバイス〕

・たくさん練習すること。練習は自信につながります。

・ゆっくり弾いて指に覚えさせる。あがってしまったても、指に覚えさせておけば弾ける。

・ピアノはギターや琴のように持ち運びができないから、どんなピアノでも気にしないで弾く  
こと。

実際は、ピアノによって演奏の音が変わる。中村絃子さんのようなプロのピアニストは専属の  
調律師がいるし、ヨーロッパの巨匠といわれるピアニストは自分のピアノを持って演奏旅行をし  
ている人もいる。



ホロヴィッツは来日したとき、高木裕さんが調律したピアノが気に入ってアメリカに持ち帰った。その軽い鍵盤のピアノで、仲道郁代さんがシューマンの子供の情景第七番「トロイメライ」を弾いた。ホロヴィッツは、この曲が好きで、アンコールによく弾いたという。

八月十日、「保育士試験は合格しました。これから登録します。いろいろ勉強になったし、役に立つと思います」というメールが来た。「よく頑張りました。すごいね」と返信した。夫が、「あなたの子供とは思えませんね」と言った。

娘は毎日金融に勤め、二歳の長男を保育園に送迎し、十二月一日出産予定の身重だった。受験日は平成二十八年七月三日（日曜日）、試験会場は鎌倉女子大学。

「ピアノが一番よくできた。ピアノをやっていてよかった。受験会場の鎌倉女子大学はレッスン室が充実していてすばりかった」と言った。私は、練習の時に聞いた「三びきのこぶた」の語りがかうまかったと思っている。

私は、国立音楽大学を卒業して京浜女子大学（鎌倉女子大学の前身）附属の中等部・高等部で音楽主任をしていた事がある。娘にその学校を見てもらえたことが嬉しかった。

娘にはピアノを中学生までやらせた。東京藝術大学附属高校に行かせたいという夢があった。私が娘に教えているのを見ていた父が言った、「ピアノ教室の生徒のように、ほがらかに教えた方がいい。それでは楽しくない」と。それはわかっていたが。娘は中学生になると「ピアノはやめる」と言った。中学二年生の時受けた神奈川方式アチーブメントテストで、国語が満点だった。

結果、国語の勉強をするという事で、その方面の大学に進んだ。無理やりピアノをやらせたことを後悔していた私は、娘が「ピアノをやっていてよかった」と言ってくれたので、ほっとした。その晩は、ぐっすり寝た。それほど後悔は大きかった。夫が「僕の忠告を聞かずに、無理じいしたからです」と厳しく言い、そして笑った。

私のピアノ教室には時々大人も来ていた。「ピアノが弾けるようになりたい」と。それは、保育士を目指している場合が多かったが、その事は、みんな口に出さなかった。レッスンに来ていた大人は、バイエルで挫折してしまう。大人になった指は硬くて動かない。「次の和音、聴こえて来るでしょう?」「そんなもの聴こえない」耳の方もだめだ。「幼稚園では必ず行事があると歌わされて、いやよね。歌が始まると、ずるずると後あとずさりしてしまうのよ」と言う人までピアノを習いに来ていた。ピアノは流れるように歌うように弾くものです。歌が嫌いでは、歌うようにピアノを弾く事は無理だ。高齢者の中には、音楽の授業中、人前で歌わされ、歌うことが嫌いになったという人は、意外に多い。

娘が、「保育士になりたい人は、保育士試験の課題曲だけ練習したらいいのに」と言ったが、ピアノ初心者、「かたつむり」や「おばけなんて ないさ」を弾きながら歌うことは簡単な事ではない。たとえそれで合格したとしても二、三曲引けた程度では使い物にならない。この場合、「造形表現」と「言語表現」を選択すればいいわけだが、だれでも懂れる華やかなピアノは、容易く弾けるように見えるのかもしれない。

娘が言った。「昨日(産休に入る前日の金曜日)は、会社の歓送迎会(娘の出産の激励会)でした。

久しぶりに会社の人と会食できて楽しかったです。これから出産まで少し自分の時間があるので、いろいろ溜<sup>た</sup>まったことを片付けようと思います。産休育休中に時間を作って何か勉強しようと思えます」と。

また夫が、「あなたの子どもとは思えませんね」と言った。「会社も一人産休では大変だろうに歓迎迎会とはすごいね。いい会社だね」「そうだね」。

## 孫の誕生

これほど嬉しい事は、ありません。平成二十八年十一月十七日（木曜日）、十七時十三分のメー<sup>ル</sup>を二十三時になってから見た。「昨日から不規則だけど陣痛あるから、そろそろ出産でも、おかしくない」と書いてあった。

予定日は十二月一日だ。随分早い。そういえば、十月中頃、孫（怜史君・二歳）を保育園に迎えに行った時、仕事から帰宅した娘を見て、お腹が大きいのが気になっていたのだが。

富水の童謡の会から帰宅すると、「生まれた」という留守電が入っていた。水を飲み、東海線で辻堂の吉田クリニックに行った。小田原駅で特急「おどりこ」号に乗車する養老孟<sup>やうろうたけし</sup>司さんに遭遇した。箱根の別荘「養老昆虫館」から東京に行くようだ。ビシッと黒のコートが決まっている。私は次の急行に乗った。

辻堂駅からバス。バスを降りると、もう二時になっていた。ピンクのパジャマ姿の娘が「早かつ

たね」と言った。元氣だったのでホツとした。「よく頑張りました」。言葉が出ない。「今日は全然寝ていない」と言うと、「ああ、陣痛のメールを見たからでしょう。お産をするのは私なのに」と笑った。

名前は「圭(けい)」に決まったとメールがあつた。「いい名前ですね。幸せにしてあげてください」とメールを返した。「よかつた、よかつた」と何度も唱えた。孫は男の子が二人になつた。長男の怜央(れお)は十一月四日生まれで三歳になつた。次男の圭は十一月十八日生まれ。「兄弟仲よく」と願っています。

## 父の歌「古城」

私が住んでいる足柄上郡大井町金手に三島神社があり、お祭りの日には夕方から芝居小屋に、地方を回つて興業する一座の芝居がかかつた。

最初は歌舞伎で有名な「蓮獅子」。親子の獅子の舞いだ。赤い長い髪(あかがしら)と白い長い髪(しろがしら)を勇壮(ゆうさう)に振つて舞う、狂いと呼ばれる激しい動きだ。

小さな神社の芝居小屋には似つかわしくない、きらびやかな息の合つた舞いを覚えている。ムシロを敷いただけの客席に人々が集い、手をたたいて喜んだ。それは、本当に美しく、夢のようだった。

『蓮獅子』が終わると、幕が下りて三橋美智也が歌う「古城」が流れた。「♪松風騒ぐ 丘の上

古城よ独り 何偲ぶ」レコードなので、針が飛んで繰り返し同じフレーズが流れたりした。父が、「ご飯を食べてから、また見に来よう」と言った。休憩なので大勢の人が席を立てて家に帰った。次に行った時には、お菊さんが皿を数えていた。「あれエーツ、いちまいい、にまいい、さんまい」お菊さんの役の人は男性のようで、太い声だった。「いいぞ、待ってました」と声がかかった。そこで幕になり、また「古城」が流れた。酒に酔った男が、いい気分で三橋美智也と一緒に大声で歌った。

江戸番町が舞台の怪談話『番町皿屋敷』<sup>ばんちょうざらやしき</sup>だけが今日の芝居の演目のようで、お菊さんが皿を数えるのは、なかなか進まなかった。「ドロドロドロン」という太鼓の音が恐かったので私は父にしがみついていた。「古城」を聴くと、お祭りの夜のこと、父のことを思い出します。テレビが普及する前のことです。

### 父の名言

「夫婦は車の両輪のようなものだ。どちらが欠けてもいけない」と、父が言った。これは名言だと思っています。つまり、ひとりでは意見や行動も一方的に走りやすくなるものです。夫婦であれば、片方が何か無理な主張をした時に、他方は戒める<sup>いまし</sup>ことができますが、ひとりではどうなるでしょうか。そのまま発言したり、行動したりすれば疎<sup>と</sup>まれます。

## 母の歌「みかんの花咲く丘」

母は九十六歳まで長生きをした。九十五歳の夏、食欲が亡くなり県立神奈川病院を紹介されて「胃ろう」の手術をしたが、「胃ろう」は半年もたず、翌年の四月三日、私の誕生日に枯れるように静かに亡くなった。

ある日、寝たまま「♪みかんの花が 咲いている」と小さい声で口を動かしていた。歌を歌うということがない人だったので驚いた。趣味で書道、絵画、陶芸などをやる人があるが、最後は歌かと確信した。寝ながらも歌は歌える。口ずさめる。

「お金を貸したら、返してもらってから、また貸すようにすればよかったのにね」と言うと、「そうだね」と言った。この時、痴呆の人とは思えないほど、ハッキリした返事だった。最後まで近所の主婦に、お金を貸した事を悔やんでいたに違いない。善意でした事が、人生の汚点となって残った。本来は、『二十四の瞳』の「大石先生のようなすばらしい先生だった」と、大勢の人に言われ、惜しまれつつ亡くなって行くはずだったのに、人助けをしたことにより一生を棒に振ってしまった。

小学校の教員をしていた母は、生活保護を受けて、貧しい生活をしている人を気の毒に思い、「明日、必ず返すからサー、お金貸してくんない」と言われれば、助けずにはいられなかったのでしょう。

## 親より長く生きる

「親が生きた年齢より一歳でも長く生きることが親孝行」という言葉を聞いた事がある。

私の場合は父が九十五歳、母が九十六歳まで生きた。それ以上長く生きなければいけない事になる。どのように生きて行けばいいのだろうか。

今年が平成三十年、国は正月を一月七日までと定め、郵便局では年賀状の販売を早々と終わりにした。

Eテレ『2355・0655年越しを御一緒にスペシャル』では、いぬどじえと戊年干支ソング「ポチが通ります」を発表した。「トポチは白犬 おもしろい犬(尾も白い犬)、イヨォー、布団一枚!」「ト竹籠かぶせると、〈犬〉が〈笑〉うになる」。歌は三山ひろしさん。現実には笑ってもいられない。

歌に出て来る「おかげ犬」とは、初めて聞く言葉だ。いったいこの犬は何か? テレビ画面には歌川広重の『東海道五十三次』『東海道 四十四 四日市 日永村追分 参宮道』(ボストン美術館・蔵)の絵が紹介される。三重県の伊勢神宮に主人にかわってお参りをする「お伊勢参りの犬」のことだ。

初夢とされる一月一日と二日の夜は、「トポチが通ります」の歌が頭をめぐって眠れなかった。さらに「おかげ犬」が迷って出て私になつた。私は犬も猫も大好き。

◆「おかげ犬」は、お伊勢参りには、お金も時間もかかるし、体力も必要になるので、行きたく

ても行けない人が大勢いました。そんな時、愛犬に代理でお参りに行ってもらう人が現れました。これが、「おかげ犬」です。伊勢神宮に向かう人に愛犬を託し、自分の代わりにお参りをしてもらうのです。最初は、知り合いの人に同行する形で主人の代わりにお参りをする、というスタイルでした。そのうち、犬だけで伊勢神宮まで無事に行つて帰ってくるケースも出てきたというから驚きです。

主人は、犬の首にしめ縄などでお金を入れた袋をぶら下げて送り出します。この姿を見た人は、おかげ犬だと分かりますから、エサを与えたり宿泊させてあげたり、大切にお世話をしたそうです。賢い犬は主人のため、まだ見たこともない伊勢神宮を目指し、旅をします。そしてお参りをして、無事に帰宅。首には、お参りの証としてお札がついている、という奇跡のような話です（インターネットによる）。